

第7回 宗門教学会議 開催報告（後半）

宗教者はどのような発信をすべきか

二〇一八年十二月十一日、第七回宗門教学会議が開催されました。今回のテーマは、「宗教者はどのような発信をすべきか」です。

ご門主さまは、法統継承式に際して、「今日の社会状況において、今までと同じように教えを次世代へと伝えることが困難になっています。また、仏教や浄土真宗の教え、親鸞聖人に対する関心はあっても、お寺とご縁がない方も多くおられます。多くの方にお寺へお参りいただけるような取り組み、教えを伝えていく工夫が必要です」と述べられています。

宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題や問題について、先見的知見を有する有識者からご提言をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会において、どのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく会議と位置づけられています。そこで、現代においてみ教えを伝えていくことが困難となってきた中で、今後どのようにみ教えを伝えていけばいいのかという、重要、かつ喫緊の課題を議論するために、本年度の宗門教学会議を開催するに至りました。

第七回宗門教学会議では、会議委員として大和証券株式会社の佐藤泰之氏、滋賀医科大学名誉教授の早島理氏、武蔵野大学名誉教授の田中ケネス氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

なお、今号では全体討議をご報告します。

○満井 本日のテーマ「宗教者はどのような発信をすべきか」の中、「どのような発信を」に焦点を当てますと、発信内容をどのようにすべきであるかが課題になります。同時に、IT社会といわれるインターネット社会において、有効な発信のツールはいかにあるべきか。こういう二点が想定されます。

発信の内容について、本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。

親鸞聖人の時代と今の時代とを比べてみたときに、まず決定的に違うのは、「生死出づべき道」が課題になりにくい時代ではないかと感じています。そういう中であって、真宗のご法義、仏教の教えをどのようにして伝えれば、ここに響くのかということになります。

こういった観点で先生方にご意見を賜りたいと思うのですが、まず田中先生は海外での伝道、あるいは教育に豊富

な経験をお持ちですが、海外、特に欧米では、自己肯定が文化土壌の基本のように思っています。これに対し真宗の法義、例えば罪悪深重の凡夫といったような機(き)の深信、あるいは、自力無効といった他力の法義、こういったことをどのようにお伝えすれば受け入れやすい、ここに響くのだろうかということについて、ご苦労と工夫といったあたりを、ご提

言いただけますでしょうか。
○田中 「浄土真宗に関する実態把握調査」に基づけば、救い・信仰・真実を求める人は、たった10%です。このことを前提に置かないといけないと思います。こうしたことは、今だけではなく、昔も比較的そうだったと思います。

○満井 先生がご提言いただいた、求められる在り方についての五つの要素(連結性・一体性・平和・調和・落ち着き)を見据えながら、それを真宗的に組み立てていくというのが、今後の在り方としては現実的だと考えてよろしいでしょうか。

○田中 私は、連結性、一体性等というのと、これは二種深信の法の深信として考えられると思うのです。浄土真宗の本願のはたらきというのは、われわれの連帯性というか、支えられている縁起(えんぎ)のはたらきとして捉えていくと、つながりや一体性ということにつながっていくのではないかと思うのです。

また、現代において信心というのは、阿弥陀さまにいたたくという表現はむしろ間違いではありませんけれど、海外でそのような表現を取ると、ではキリスト教とどう違うのかというような問題が出てくるのです。そこで、現代の宗教のパラダイムシフト(構造内容)の中で、「目覚める宗教」に移行していることを前提とすると、親鸞聖人の智慧という表現を強調していけば人は向いてくれると思うのです。

○満井 目覚めの宗教というふうにご提言いただいて、全体的な趨勢(すうせい)はそうだといいことですが、死ぬまで罪悪生死の凡夫だという凡夫性と、信心獲得の上か



らどこが変わるのかといったような問題があると思いますが、いかがですか。

○田中 もちろん信心をいただくとは変化はあると思います。信心というのは、何も変わらないのではなくて、やはり正定聚じょうじゆの位くらゐに達するのは明らかで、精神的にも、心的にも変化の自覚はあると思います。現代人には、自分が自覚する面があることに説得力があると思います。

○満井 寮頭たすく和上も、『聖典』の英訳化に長い間携たずさわってこられました、それにあたってご苦労くださったこと、あるいは工夫してくださっていることなど、気

付いたことがありでしたらご提案いただくと思います。

○徳永 私は、京都女子大学で三十三年教えました。京都女子大学は必修科目として仏教学を受講させていますが、はじめは聞いてくれません。それをなんとかして聞かせるということを三十三年やってきたわけです。

もう一つの経験としては、ハーバード大学の神学部しんがくぶに五回ぐらい行きました。その内の一回は一学期から、「Shin Buddhism」というタイトルの講義を担当しました。浄土真宗は英語で言うと、Shin Buddhismですね。そのとき「Shin Buddhism」というのは、「Shintoismのことか」と質問されました。Shintoismとは神道しんどうのことです。浄土真宗がいかに認知されていないかということですよ。

お寺でも同じではないですか。お寺に聴聞ちやうもんに来る人だけ、浄土真宗のことをわかっている人だけが対象で、その逆の方向は成り立っていないということですね。

田中先生がお話のときに引き合いに出された『ニューヨーク・タイムズ』の一面を使つて出たエッセーがあります。二人の学者が親鸞思想について書いてくれています。このことは、いかに現代にとつて親鸞思想に意味があるかということを示しています。ところが、このエッセーを見た方の中で行信論ぎやうしんがないという批判をする方がありました。しかし、アメリカの学者が書いた文章の中に伝統宗学でいわれるような行信論があると思われませんか。行信論が関所となつて、入口を狭くしているんじゃないかと思うのです。親鸞思想について言及するならば、伝統的な学説を踏まえて言及していなければならぬ。このような認識だけならば、変えていく必要があると思いませんか。

○満井 早鳥先生は、仏教関係者と医療関係者との交流をご提案くださいました。しかし、宗教の論理と医学の論理ということについては、方法的にも違う部分があると思いますが、どんなかたち

で連携すればいいのでしょうか。

○早島 基本的には、医師にできること、あるいは、医師だけができることと、医師でもできないこと、僧侶にできることと、僧侶でもできないこと、という、ある種の役割分担だろうと思います。

○満井 最初の共通テーマへ戻って、仏教学者として、あるいは大乘仏教の可能性として、こんなことが今まで伝えられなかった、伝わっていなかった、といった部分でお気付きの点があればお願いいたします。

○早島 京都大学のサル学の先生方と話す機会があったときに、サルと人間がどう違うかということを説明してもらった中で、人間だけが絶望と希望を持ち得るという話が記憶に残っています。絶望と希望を持ち得るのは人間だけであるというときに、重要なのは絶望をどのようにときに、重要なのは絶望をどのように希望へと転換できるか。希望だけを言っても、絶望だけを言っても何も生まれません。人間だけが持っているその両面を見

据えた上で、絶望から希望に転換し得るという、その部分をどうやって伝えるのか、ということでしょうか。

○丘山 大乘仏教の可能性ということでは、「生死を超える」という言い方があります。そのとき、私は生死を超えつつ人とともにということが、どこか根本的にあるのではないかなというふうに思っているんです。

○田中 アメリカで瞑想がなぜ魅力的かという点、瞑想は個人的な営みだけけど、それを通してつながりを発見するんです。マインドフルネス瞑想が今流行はやって



いますが、マインドフルネス瞑想には、他のつながりという瞑想法もあるんです。初期仏教経典の『四念処しねんじょ経』に説かれる四無量心しむりょうしんがありますよね。四無量心は、個人にとどまるのではなくて、やはり他者とのつながり、他者への思いやりを養成する瞑想法なのです。

○早島 お念仏を通してのちのちの大切さに気付くという、その気付き方とは、人間は一人では生きていけない、ありとあらゆるもののおかげで生きている、つまり生かされているという、そこに気付かないと、いのちの大切さに気付いたとは言えないだろうと思います。

その生かされているとは、世俗の中では、世俗のありとあらゆるものに生かされているのですが、実は世俗のいのちの在り方は、もつと大きな力に支えられていることに気付く、その時点で初めて、自分では輝けないいのちが無量の光によって輝かされているという気付きになるのかなと思います。そういう意味で、お念仏の世界も、縁起そのものの世界に他

ならないと考えています。

○満井 佐藤先生のご提言は、データを基にして、客観的に可視化できる課題を提示してくださったものであって、可能性とともに危険性も併せてお示しくださいました。そこで、どのようなメッセージが人々のところに響いていくのかについて、ご助言をいただければ幸いですか。

○佐藤 全般的に宗教法人が行っていらっしゃる情報伝達というのは、ある一定のレベル以上の方々に向けたものになっているのかなということが感じられます。浄土真宗本願寺派とご縁のない方に対しては、どのような情報が必要なのかということを少し考えていただけるといいのかなと思います。「伝える」と「伝わる」という側面があります。「伝わる」を意識しないと、特に若い世代の方が仏教に関心を持ち、浄土真宗の基礎的なことを知りたいといったときに、相手にとっては難しく理解しづらい情報しか提供できず、結果的に「伝わらない、わから

ない」ままで終わることが懸念されま
す。レベル感に合わせた情報提供を行う
ことが必要です。

また、今回の調査結果では、法話を聞
きたいという方が多いことがデータ上に
表れております。浄土真宗の各宗は他宗
に比べて、法話を多く行っていると言わ
れる中で、このような回答が高い比率に
なっているということは、浄土真宗のお
寺では法話を行っているということを門
徒の皆さまや一般の方に意識されていな
い、すなわち情報発信していることすら
気付いていないことを示す一つの根拠に
なります。まずは、気付かせ意識させる
ことが重要です。

○藤丸 テーマの内容は、何を、どのよ
うに伝えるかということでしたが、両方
に関連するものとして重要な要素が出て
きたかなと思います。私は大学の授業
で、仏教の熟語を漢字で書かせて仏教が
どれほど認知されているかを調べている
んですが、ご縁という言葉を書かせる
と、だいたい二割程度しか書けない状況

に今なっています。

しかし、今日お話を聞きしている
と、人間関係が一番問題になっていると
いうことは、やはりご縁の問題だと思
います。佐藤先生のご発表の中では、真宗
十派だと、例えば家族に相談できると
か、関係づくりが大切であるという数字
が高く出ているということは、ご縁的な
要素を育んできたところがあるかなと思
います。

私たちは、阿弥陀仏とのご縁の中でと
いう教えをいただいているわけですが
ら、そのあたりのことで何を伝えるかと
いうのも、まさしく個人の問題ではな
く、「われわれ」とか「十方衆生」とい
うところへ意識を広めた関係の中で考え
なくてはいけないのかと思いました。

そこで、早島先生に一つ質問です。個
別に対応していくことが大切だというご
議論をしていただいたと思うんですけれ
ども、そのときに、私たちが阿弥陀仏と
のご縁とか、結果的にいろんなご縁を伝
えてきたということが、例えば悩んでい

る方に関わっていくところは何らかの影響を持ち得るのでしょうか。

○早島 広島で公開講座を開催したときに、看護師さんから傾聴活動というのは自分たちもしていると言われた後に、「お坊さんにしかできない傾聴活動は何ですか」と聞かれて、絶句してしまった経験があります。僧侶だからできる、僧侶にしかできない傾聴活動という視点は、私はその時に指摘されるまで考えたことがなかったのです。

今のテーマに戻りますと、僧侶だからできる対応というのは、表面には直接的に出ないかもしれませんが、いわば僧侶としてずっと蓄えてきたものが、具体的な傾聴活動だったり、具体的な話の仕方だったりというところに出てくる。出てくるところは非常に個別的なのですが、個別的なものを支えているのは実は、真宗教義の深い受け止めや、仏教思想の根本的な理解であると思います。

われわれは、常日頃から、こういう対応の仕方でのいいのか、こういう説明の仕

方でいいのかということを決えずに続ける必要があります。問いつけることは、お念仏の受け止め方を含め自分の生き方はこれでいいのだろうかということを常に自分に問い続けることであり、そのことを絶え間なく積み上げていくしかないのではないかなと思います。

○満井 最後に三人の先生方から一言ずつメッセージを私たちにお寄せいただければありがたいと思います。

○田中 今日、本庶ほんじよたく先生がノーベル賞を受賞したニュースを見ました。その時、先生の成功の理由について執着心だと言っていました。私は、仏教でネガティブな言葉が、いい言葉として使われていてびびくりしました。しかし、「往生した」「諦あきらめた」とか、仏教のいい言葉が悪い言葉に変わってしまいます。ということは、現代は、日常で使われている仏教の言葉が本来どういう意味を持つかということを発信するチャンスでもあるかなと思います。

○早島 医療と仏教のつながりに絞しぼって

言うと、医師だからできること、医師でもできないこと、僧侶だからできること、僧侶でもできないことはたくさんあります。ですから僧侶だけが、お寺だけが抱かかえ込んでやるうというのではなく、できるだけ外へ出掛けて行って、いろんな職種の人と個々のテーマで話合っていて、誰かに任せて丸投げにするのではなくて、一緒に活動することが大切ではないでしょうか。

○佐藤 ホームページの話を中心に情報発信のをご説明をさせていただきましたために少し誤解されてしまったかも



しれません。インターネット、書籍、新聞など、これらは情報を伝えるための、ただの媒体、手段でしかありません。情報を伝えるのは、皆さま僧侶の大切な役割になります。

ホームページをはじめとした様々な媒体からの情報発信を受けて仏教に高い関心を持った方は、実際にお寺を訪問し

て、自分自身そのお寺や僧侶を確かめるという行動を取ると思えます。そのときに僧侶の方がみ教えに導いていけるのか、すなわち情報を正しく伝えることができるかということは非常に大事な要素になります。

そうしたことを考えた際、浄土真宗本願寺派が取り組まれております「僧侶の

質を向上すること」というのは、真宗門徒の「信仰をしていてよかった」という回答、すなわち浄土真宗のみ教えが「伝わった」と深く関連しているといえます。浄土真宗を信仰してよかったと思われることは、皆さまにとって非常に素晴らしいことではないかと考えます。

閉会 座長あいさつ

総合研究所 所長

丘山 願海 氏

本日は先生方、ありがとうございました。

実は今年、城陽の「特別養護老人ホーム ビハーラ本願寺」に初めて行きました。そこでは、一つの課題、例えば認知症に向き合うときも、医者が全て解決できるわけではない。では僧侶

が解決できるかといえは、そうではない。それぞれの力を發揮して、一つの課題をみんなで解決の方向に持っていくこととされていきました。私たちは「one of them」、一つの課題に取り組む一員なんだと感じました。一員でしかあり得ない。でも、それぞれが貴重

な一員である。そういう意味で、僧侶は、もう少し役に立ちたいなと思ってるんです。

それから、もう一つは僧侶の定義とすることで、僧侶育成体系プロジェクトの方からもご報告していますけれども、やはり僧侶というのは常に自分の生き方を問いながら生きていくものである。やはり現実に生きるときは、私自身が生きることとを問いながら、そこではなく共感できないのではないか。私たちはもう平気だから、あなた方に寄

り添うんだというのではなくて、共に生きることを問い続ける。やはり私たちは現実の中で悩みながら、悲しみながら共に生きているんだということが大事だと思います。

先日、秋の法要に際し、ご門主さまが「私たちのちかい」を示してください

いました。ご発題の中で田中先生が「Golden Chain」を紹介してくださいでしたが、「Golden Chain」と「私たちのちかい」の両方を見比べながら、何となく似ているという印象を持ちました。また、実際にわかるような言葉で「門主さまは示されている。

私たちも、実践していかなければいけない。その見本をご門主さまは示してください。それが「私たちのちかい」なんだというふうに思います。

今日は先生方、本当にありがとうございました。